

大毛の極樂寺について

小西存祐

近ごろ同寺よりして、建曆版の「註十疑論」が発見されたといふので、一部の人々には、却つてその名が知られてゐるが、同寺が宗祖の御遺跡であるといふことに就ては、あまり多く世間で知られてゐない様である。

大毛といふは、愛知縣尾張國葉栗郡葉栗村の村内にある大字の名で、汽車は東海道線の本會川驛から、東方約二十丁の所にある村落である。近在では、極樂寺といふよりは「天神さんのお寺」といつた方が能く通ずる。境内に有名な天神さんが在るからである。

處で、こうした邊鄙な所に、さふして宗祖の御遺跡があるか云ふに、尾張風土記の中に、「當國葉栗郡若栗の極樂寺は、法然上人三夏不出の繡室なり」といふ記事が見へてゐる。初め清光寺(伊勢松阪)の信岡上人が、この文を看て不審を懷かれ、いろいろと取調べられたところ、遠州内田村應聲院の記によつて、同極樂寺は、宗祖が櫻が池へ參拜の途次、立寄られた御遺所である云ふことが解かつた。天文年間、木曾川の洪水に遇つて堂宇こころく流失し、一時廢絶の貌を爲つてゐたのを、文政の初め、信岡上人が知恩院の門主(六十世)泰譽在心僧正に請ふて復興せられたもので、原の位置(北極樂寺の東)には、今なほ圓光庵といふ尼庵が残つてゐる。事はまた信岡上人の自叙傳(略傳)の内にも見へてゐる。

文化十五年戊寅(秋改元)再興圓光大師道跡尾州葉栗郡極樂寺別有記焉。

謂ふところの「記」といふは、同じく信岡上人によつて纂輯された望西の「聖光上人別傳」の附録に、「尾張國圓光大師遺蹟再興記」と題して、次の如く云つてある。

問嘗覽尾張風土記殘篇、曰葉栗郡若栗極樂寺者、法然上人三夏不出之繩室也。故問憶久矣。去冬有容、譚及于此。云木曾川上有「一村名極樂寺者」、乃隸葉栗郡。此其遺蹟非耶。今春往其村、側問古老。傳云、往昔有寺、爲洪水漂流、唯名是存。於是知、殘篇所記、亦信然矣。仍慨然發再興之願、數々請官遂許可。經日土木功畢、扁曰甘露山極樂寺。即聞之于華頂山、辱嘉其舉、賜寺鎮三品黃金若干。問夙願爰滿矣。嗚乎物有興廢、道常存。此吾大師護持力之所致者乎。請同志者思諸。

文政紀元戊寅九月

勢州松阪清光寺信問謹記。

尙ほ同寺の緣起に關しては、現在卷物が三本傳つてゐる。何づれも文政元年に書かれたものであるが、一卷は「圓光大師御遺蹟再興記」といつて、信問上人の筆に成つてゐる。一卷はまた「圓光大師靈像緣起」と題し、大和當麻奥之院の現定上人の記に在る。今ま一卷は「圓光大師舍利記」といつて、京都押小路專念寺の隆圓上人の記になつてゐる。

寶物としては、別にはれぞ注意すべき程のものはないが、たゞ一つ建曆元年開板の「註十疑論」だけは、特に珍重に値する。言ふ迄もなく建曆元年は宗祖御入滅の前年で、即ち選擇集が初めて開板された歳である。何ふしてか、る寺に、さふした珍らしいものが傳來されてきたかは明らかでないが、こもかく宗祖の御遺跡といふ寺に、建曆版の古板本といふは、何だかゆかしい感じがする。